

岩石を信仰していた日本人

吉川宗明著

評・三浦 佑之

(古代文学研究者
立正大教授)

なぜか人は岩石に魅せられ、そつと触れてみる。湯殿山神社(山形県)の御神体、神倉神社(和歌山県)のゴトビキ岩、玄界灘の孤島・沖ノ島(福岡県)に立つ巨石群などを前に

引きつける手堅い研究

本書は始まる。そして今までの研究を修正するために、概念規定の明確化を提唱する。岩石が相手だけに、著者の研究はきわめて手堅い。

日本列島の各地に散らばる千か所以上の事例を集めた上で、それら祭祀対象の岩石を、それ自体が「信仰対象」となった岩石、「信仰

対象」となった岩石、「信仰者」と信仰対象の間を取り持つ媒体」とされる岩石、偉人の腰掛け岩のように聖跡として伝えられる岩石など五つの基本類型に分類し、それに基づいて詳細な下位分類を試みる。そのように緻密なとらえ返しをすることによって、あいまいさを残したままに論じられてきた岩石祭祀研究を、学問として確立しようとするのである。

こうして紹介すると、たいそう堅苦しい本のようなのだが、さにあらず。後半では、岩石祭祀の現場のいくつかがわかりやすく紹介されている。しかも著書に載せきれない全容は、著者が運営するウェブサイト「岩石祭祀学提唱地」で公開されている。ところが残念なことに、その有益で貴重な情報は、無料HPサイトの閉鎖により、間もなく縮小移転せざるをえないらしい。どこかに、支援してくれる組織があればいいのだが。

◇よしかわ・むねあき 1988年、三重県生まれ。立命館大考古学コース卒。独自に岩石信仰を調査研究する。



遊タイム出版
3500円

すると、信仰心のない私でさえ神々しさを感じてしまう。そういえば、古代の明日香はさまざまな形に加工された岩石が立ち並ぶ都だった。

本書の著者は、そうした岩石の魅力に取りつかれた研究者のひとりである。すさまじい執念とでも形容するしかない態度で岩石に向き合うが、単なるマニアでもおたくでもない。あくまでも冷静に、研究対象として岩石祭祀を分類し、それを通して人間の心に向き合おうとする。

柳田國男、折口信夫、鳥居龍蔵、大場磐雄、野本寛一ら錚々たる民俗学者や考古学者による岩石信仰の研究史を批判的に検証するところから